

今から語るのは、五年前の葉桜の季節に亡くなった父から何度となく聞かされた話である。

日比谷の名物ビルの一つ、日本電信電話公社本社ビルの最上階にはあの真藤恒しやうがいた。電々公社の民営化を見据えて、一九八一年（昭和五十六年）、最後の総裁として着任した彼は、四年後には、民営化されたNTTの初代社長の座に就くことになる。

その真藤が、父たち現場の管理者を集めた会議室で、壇上から言葉を放った。その頃、父は都内の大規模電話局で局長を務めていた。

「えー、わたくしが、電々公社の総裁を務めることになりました、真藤です」

真藤の声はマイクを通して冷たく響いた。

「今日からは、現場の、お前らのことも含めて……」

と挨拶が始まったが、父をはじめ生え抜きの公社職員たちは、その一言に耳を疑った。総裁とはいえ、よそ者の真藤から自分たちを、「お前ら」呼ばわりされたのだ。

ある管理職の顔は、怒りで真っ赤になった。彼は、真藤の目を見て、何かいい返そうとしたが、周りの同僚たちに制された。大会議室の空気は一瞬にして凍りついた。

これ以降、真藤は父たちの間では賊軍から来た悪者と見なされた。

真藤は、九州帝国大学で造船学を学んだ男である。石川島播磨重工業の社長にまで上り詰めた彼は、二流だった同社を、造船部門において、名門三菱重工業を追い抜くまでに育てあげた。

しかし、造船不況の嵐が吹き荒れる中、彼は合理化による大量解雇の責任をとって、同社を去った。会長の座も退いていた。

そんな真藤にも、胸を張れる過去があった。

彼は、戦艦大和を建造した海軍きつての天才技術者・西島亮二の薫陶を受けているのだ。

真藤が九大在学中のことであった。

西島はドイツで造船技術を学んだ技術将校である。海軍省の上層部に命じられ、わずか四年数か月であの戦艦大和を完成させている。

西島の姿は、真藤の記憶に深く刻まれていた。

かつて、造船は、底部から上部へと組み上げていく工法をとっていた。しかし、西島亮二はその常識を打ち破った。工期短縮のため、ブロックごとに分けて船体を作る工法を、日本で最初に採用した。

戦後、世界は原油の大量輸送が必要不可欠な時代に入っていた。石川島播磨重工業の若手技術者であった真藤は、そんな時代を先取りしたアメリカの海運王の依頼を受けた。

彼は、西島から伝授された「ブロック工法」も駆使しながら、呉市の造船所で、一大プロジェクトに取り組んだ。

結果、わずか九か月という短期間で、三八〇〇〇トンのタンカーを造りあげた。その船は、世界に誇る巨大船であった。

船は「ペトロクレ」と命名された。ちなみに「ペトロ」とは「石油」、「クレ」とは「呉」のことである。

その後、真藤は、数々の合理化案を現実のものとして、同社を発展させていった。

会社を去った真藤は、何の役職にも就かずぶらぶらしていた。彼は、石川島播磨重工業の会長を辞めた後、自分の居場所を見失っていた。

その彼に、白羽の矢が立った。民間人として政府の要職を務めていた土光敏夫（当時、第二次臨時行政調査会会長）が、電々公社の民営化の旗手として、真藤を抜擢したのである。

土光は、石川島播磨重工業では真藤の先輩にあたり、同社の社長も務めていた。彼は、真藤の才能を高く評価していた。

真藤が電々公社へ乗り込んで来たことで、次期総裁と目されていた北原安定は、最後まで副総裁の地位に甘んじることになった。

北原は、電々公社きっての論客で、切れ者としてその名を馳せていた。父たち部下は、その名前から、親しみを込めて「あんていさん」と呼んでいた。

彼は、真藤のことを快く思っていなかったのかもしれない。真藤は、結果的に、自分の地位を奪ったよそ者であった。

世間では、北原と真藤は犬猿の仲と噂された。本社の廊下ですれ違っただけであるのに、「真藤と北原、またもニアミス」などと週刊誌は書き立てた。

だが真藤は気にしなかった。彼は、自分の使命に集中していた。新生NTTの初代社長となつてからは、真藤は数々の合理化を成し遂げ、電々公社を民営化へと導いた。

その間、父たち生え抜きは、当然のことながら、北原びいきであった。

剛腕の真藤だったが、リクルートへ便宜を図った見返りにリクルートコスモスの未公開株の譲渡を受けたことが発覚し、一九八八年（昭和六十三年）に、NTT会長を辞任している。後に、逮捕もされた。

真藤は、自分の罪を弁明することもなく、「もしあの清廉な土光さんが生きていたらオレは破門だな」と後悔を口にした。

公職や経営の一線からは完全に身を引き、彼の妻によると、最後は一個の老人としてその生涯を終えた。

逮捕されたのは真藤だけではない。リクルート事件は、当時の政財界を巻き込む大事件であった。



二〇一四年（平成二十六年）に、NHKの朝の連続テレビ小説『花子とアン』が全国放送された。

その中で、石炭王・加納伝助の役を俳優の吉田鋼太郎が好演した。筑豊の実業家であり炭鉱主の伊藤伝右衛門でんえもんをモチーフとした役どころであった。

筑豊とは、かつて三井三池炭鉱などにも代表される石炭産業で繁栄した一帯を指す地域名である。

その番組のいくつかのシーンを通して、私はこれまで気づかなかった、ある真相を目の当たりにした。

それは、筑豊の男性が部下や目下の者に対して「お前ら」という時には、それはその人物の男気であり愛情表現である、という事実だった。

真藤はその筑豊も近い久留米市の出身だ。初対面の父たちには、真藤のそんな愛情表現は、残念ながら、裏目に出てしまったのである。

一度賊軍と見なされると、する事なす事、すべてがそういう目で見られてしまうのは、この世の常である。

父たちには申しわけないが、こんな経緯もあり、私には、真藤恒を賊軍から来た悪者と決めつけることはもうできなくなっていた。